

発達障害児の行動に対する教師の気づき

松山 郁夫*

Awareness of Teachers about the Behavior of Children with Developmental Disorders

Ikuo MATSUYAMA

【要約】発達障害児に対して適切な教育を行うためには、教師が発達障害児の行動をどのように捉えているのかを明らかにする必要がある。本研究の目的は、発達障害児の行動に対する教師の気づきについて考察することとする。教師に発達障害児の行動に対して気づいたことを記述してもらい、その内容を検討した。その結果、教師は発達障害児に対して、好ましくない行動に強く関心を向けながらも、好ましい行動にも着目して教育を行っていること等が考察された。

【キーワード】発達障害児、発達障害児の行動、教師、気づき

I はじめに

2012年に文部科学省が公表した発達障害に関する調査結果において、通常学級に在籍する公立小・中学生の6.5%が発達障害の可能性があるとされた。学習面で「読む」「書く」「計算する」「推論する」などで著しい困難を示す「学習障害」は4.5%、行動面で「不注意」「多動性—衝動性」が著しい「注意欠陥多動性障害」は3.1%、対人関係やこだわりなどの問題を起こす「自閉症・アスペルガー症候群」は1.1%で、一部ではこれらが重複していた。また、校内委員会で特別な教育的支援を必要と判断されていないが、約8割の学校で担任の努力や指導の工夫などで済まされていた。いずれの支援もなされていない学校が8割強であり、約4割が支援を必要としていた。このため、障害の理解だけでなく、具体的に個別指導、座席位置の配慮、コミュニケーション上の配慮、習熟度別学習の実施、個別の課題の工夫など、適切な指導をする必要があると報告された¹⁾。

教師集団は、他の職場と違って教師同士に職務上の緊密な結びつきが少なく、教師個々の独立性と分離性が保たれているという特徴を持つとされる²⁾。教師個々の自立性が保障され、学級経営や教科指導に関しては、教師の専門的な能力に基づいた独自性が尊重されている。このような職種上の特徴を持つことから、一般に教師は援助を受けることに慣れていないため、ともすれば一人で問題を抱え込んでしまいやすいと指摘されている³⁾。したがって、発達障害児に対する教育を充実させるためには、教師同

*佐賀大学文化教育学部

士で発達障害児をどのように捉えているのかを検討することが不可欠と考えられる⁴⁾。そのためには、まず、教師が担当する発達障害児の行動に対して、どのように捉えているのかを明らかにする必要がある。このため、本研究の目的は、発達障害児の行動に対する教師の気づきについて検討することとする。

II 方法

2013年度に行われた発達障害児への接し方に関する研修会に参加した、小・中学校の普通学級や特別支援学級において、発達障害児を担当している16名の教師に対して、質問紙調査を行った。なお、全員が10年以上教師としての経験を有している。質問紙調査票に、発達障害児の行動に対して気づいたことを、「現在している好ましくない行動」と「現在している好ましい行動」に分けて、思いつく範囲で、箇条書きによって記述してもらった。その後、記述された文章のうち、内容が同じものに分類し、各内容について検討した。

倫理的配慮としては、事前に、記述した内容を発達障害児に関する研究に使用する際、分類した記述内容を基にして分析するため、個人のプライバシーは保護されること、および学校にも一切不利益がないことを説明し、全員から同意を得ている。

III 結果

発達障害児における好ましくない行動に関しては、計64件(61.5%)の記述がなされていた(表1)。それらの内容は、件数の多い方から、①感情をコントロールできなくなり、ものにあたる、いつも落ち着かない、よくしゃべる等の「自己コントロールの低さ」(22件の記述:34.4%)、②気に入らないとプリントを破る、机をたたいたりしてもものにあたる、突然、奇声を上げる等の「不適応行動が目立つこと」(9件の記述:14.1%)、③忘れ物や物をなくすことが多い、整理整頓が苦手、字が乱雑等の「不器用さ」(9件の記述:14.1%)、④好きなものへのこだわりがあり、そのことについてずっと話す、爪を極端に短く切ってしまう、場所や人を決めてかかり、違ふと騒ぎ出す等の「行動における奇妙さ」(8件の記述:12.5%)、⑤他人を傷つける言動が目立つ、他人に対して叩いたりする、暴力や暴言が多い等の「他者に対する攻撃的行動」(8件の記述:12.5%)、⑥集団に入りたがらない、他児が近くに来ると嫌と言って避ける等の「集団適応への困難さ」(6件の記述:9.4%)、⑦文章の読み取りができない、授業に集中できない「学習における困難さ」(2件の記述:3.1%)であった。

発達障害児における好ましい行動に関しては、計40件(38.5%)の記述がなされていた(表2)。それらの内容は件数の多い方から、①約束したことは守る、友達の悪いところを注意する、頼まれた仕事には責任を持つ等の「社会的な適応行動」(12件の記述:30.0%)、②好きなことには積極的に取り組む、自分の得意なことにととても詳しい、探究心が強い等の「興味・関心のある事柄に集中できること」(11件の記述:27.5%)、③我慢している、自分のすべきことをきちんとする、時計を見て、時間通りに園生活を過ごす等の「自分の行動をコントロールすること」(9件の記述:22.5%)、④周りの子供と協力して活動しようと努力している、どの子供とも話ができる等の「子供との関わり」(6件の記述:15.0%)、⑤周囲の大人と話をすることができる、お母さんには優しいとの「大人との関わり」(2件の記述:5.0%)であった。

表1 発達障害児における好ましくない行動に関する記述（計64件の記述）

<p>①自己コントロールの低さ：22件の記述（34.4%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感情をコントロールできなくなり、ものにあたる。 ・いつも落ち着かない。 ・よくしゃべる ・疲れるとしゃべり続ける。 ・雨や曇りの日は情緒が不安定になる。 ・姿勢が保てない。 ・興奮するとウロウロする。 ・一度何かあると、しばらくは気持ちの切り替えができない。 ・失敗したりできなかつたりすると怒り出す。 ・おとなしくしておくことができない。 ・しようと思うことができなかつたら極端に落ち込む。 ・集合時間に遅れる。 ・気持ちが昂ると今までできていたことができなくなる。 ・気になることがあると、そのことで頭がいっぱいになり、活動が止まる。 ・自分の気持ちが通らないとかんしゃくを起こす。 ・行動が衝動的。 ・気分が波がある。 ・疲れやすく、すぐに横たわってしまう。 ・自分で考えて行動することが苦手である。 ・急な予定変更に対応できず、戸惑ってしまう。 ・トイレに一人で行くことができない。 ・一つのことに集中していても他の興味のあることが出てくると、作業を投げ出してそちらに集中してしまう。
<p>②不適応行動が目立つこと：9件の記述（14.1%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気に入らないとプリントを破る。 ・机をたたいたりしてものにあたる。 ・突然、奇声を上げる。 ・不登校になっている。 ・他児の関心を引くために、わざとたばこを吸ったりスプレーをまいたりする。 ・他者とのコミュニケーションがとれない。 ・友達との間にトラブルがあるとパニックを起こす。 ・授業中、友達に話しかけたりちょっかいをかけたりする。 ・わざと机を倒す。
<p>③不器用さ：9件の記述（14.1%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・忘れ物や物をなくすことが多い。 ・整理整頓が苦手 ・字が乱雑 ・手先がとっても不器用 ・机のまわりにものを落とすことが多い。 ・引き出しの中がぐちゃぐちゃになっている。 ・板書の字をノートに写せない。 マット運動ができない。 ・100m走を完走できない。
<p>④行動における奇妙さ：8件の記述（12.5%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・好きなものへのこだわりがあり、そのことについてずっと話す。 ・爪を極端に短く切ってしまう。 ・場所や人を決めてかかり、違ふと騒ぎ出す。 ・眉毛を黒マジックで塗ってしまう。 ・刃物に対する興味が強い。 ・鉛筆で問題を黒く塗りつぶしてしまう。 ・工場の作業の音や音楽のリコーダー等の大きな音に敏感で極度に嫌がる。 ・ボーとしていることが多い。
<p>⑤他者に対する攻撃的行動：8件の記述（12.5%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他人を傷つける言動が目立つ ・他人に対して叩いたりする ・暴力や暴言が多い。 ・友達を叩いてしまう ・友達が嫌がることをする。 ・周囲の人が嫌がることをする。 ・自分の勘違いで喧嘩を仕掛ける。 ・思い通りにならないと友達に手を出す。
<p>⑥集団適応への困難さ：6件の記述（9.4%）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集団に入りたがらない。 ・他児が近くに来ると嫌と言って避ける。 ・集団活動をしていても自分の思いが最優先で、自分の興味のあることに取り組もうとする。 ・集団との関わりをもちたがらない。 ・相手の思いを考えずに、一方的に自分の考えだけを言う。 ・指示をしても一回では通らない。

⑦学習における困難さ：2件の記述（3.1%）

- ・文章の読み取りができない。
- ・授業に集中できない。

表2 発達障害児における好ましい行動に関する記述（計40件の記述）

<p>①社会的な適応行動：12件の記述（30.0%）</p> <ul style="list-style-type: none">・約束したことは守る。・友達の悪いところを注意する。・頼まれた仕事には責任を持つ・困っている友達にすぐ気づく・リーダー格としての行動が目立つ・友達の椅子が雑に置いてあると、そっと机の下に入れる。・進んで手伝いをする・ありがとうと自分から言えることが増えた。・自分から進んで挨拶することが増えた。・板書を早く写せるようになった。・集団活動に興味を持っている。・人に優しい
<p>②興味・関心のある事柄に集中できること：11件の記述（27.5%）</p> <ul style="list-style-type: none">・好きなことには積極的に取り組む・自分の得意なことにとっても詳しい・探究心が強い・塗り絵などの作業にはのめりこむ・数学と理科が好き・絵を描くことが好き・興味や関心の高いことについては熱心に取り組む。・興味があることわざや慣用語の知識が豊富・読書や図工等、自分の興味のあることに没頭する。・自由な発想ができる。・話を聞いていて、よく覚えている。
<p>③自分の行動をコントロールすること：9件の記述（22.5%）</p> <ul style="list-style-type: none">・我慢している。・自分のすべきことをきちんとする。・時計を見て、時間通りに園生活を過ごす。・いつも安定していてにこにこしている。・保育室で過ごしたくないときに過ごす場所を決める。・自分の気持ちが昂ったり落ち込んだりしたら、クールダウンするための部屋に行く。・宿題はきちんとする。・スケジュールを見ながら行動する。・決められたことを、保育者に促されたり手伝ってもらったりしながらもしようとする。
<p>④子供との関わり：6件の記述（15.0%）</p> <ul style="list-style-type: none">・周りの子供と協力して活動しようとする努力している。・どの子供とも話ができる。・大好きな友達には、積極的に挨拶する。・級友の楽しそうな声に目を向ける。・友達との関わりを楽しめるようになった。・自分の思いを友達に伝えようとする姿が見られる。
<p>⑤大人との関わり：2件の記述（5.0%）</p> <ul style="list-style-type: none">・周囲の大人と話をすることができる。・お母さんには優しい。

IV 考察

発達障害児における好ましい行動に関する記述よりも好ましくない行動に関する記述の方が多く、6割以上が好ましくない行動についてであった。発達障害児を担当する教師は、その好ましくない行動に強く関心を向けながらも、好ましい行動にも着目して教育を行っていることが窺える。

発達障害については、発達障害者支援法で、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能の障害であって、その症状が通常低年齢において発現するもの」と規定されている。

自閉症については、自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder: ASD）として、「社会性の障害」、「コミュニケーションの障害」、「想像力の障害」の三つ組によって特徴づけられる障害で、社会

性の障害は社会的相互作用の問題とされている (Wing 1998) ⁵⁾。

学習障害については、文部科学省が「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない」としている ⁶⁾。

学習障害には、注意欠陥/多動性障害 (Attention Deficit and Hyperactivity Disorder: AD/HD) が 30%から 50% 程度合併するとされている (上野 2003) ⁷⁾。注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) については、文部科学省が、「年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。また、7 歳以前に現れ、その状態が持続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される」と定義している ⁸⁾。

発達障害の障害特性については、以上のように一般化されている。発達障害児における好ましくない行動に関する記述は、多い方から、「自己コントロールの低さ」、「不適応行動が目立つこと」と「不器用さ」、「行動における奇妙さ」と「他者に対する攻撃的行動」、「集団適応への困難さ」、「学習における困難さ」であった。つまり、上記の発達障害に関する定義にある行動特徴や障害特性と同様の内容が記述されている。したがって、教師は、発達障害児の行動特徴や障害特性を、教育上の問題として捉えているものと判断される。

発達障害児における好ましい行動に関する記述は、多い方から、「社会的な適応行動」、「興味・関心のある事柄に集中できること」、「自分の行動をコントロールすること」、「子供との関わり」、「大人との関わり」についてであった。これにより、発達障害児における好ましくない行動と好ましい行動に関する記述において、「自己コントロールの低さ」と「自分の行動をコントロールすること」、「不適応行動が目立つこと」・「集団適応への困難さ」と「社会的な適応行動」、「不器用さ」・「学習における困難さ」と「興味・関心のある事柄に集中できること」、および「他者に対する攻撃的行動」と「子供との関わり」・「大人との関わり」については、各々相反する内容となっていると窺える。そのため、教師は発達障害児の不適応行動を好ましくない行動として、およびその適応行動を好ましい行動として捉えていると言えよう。

教師は発達障害児に対して障害特性に関心を向けていること、障害特性を全般的に捉えようとしていること、および受容的に接したり長所を見出したりするように心がけながら教育に取り組んでいることが示唆されている ⁹⁾。そこで、教師は、発達障害児の行動特徴や障害特性の変化を見ながら、教育を行っていると推察される。

今後、教師における発達障害児の行動に対する捉え方を、発達障害児への教育のあり方を検討する際、どのように活用するのかを考察する必要がある。

V 結 論

教師は発達障害児における、①好ましくない行動に強く関心を向けながらも、好ましい行動にも着目して教育を行っている。②行動特徴や障害特性について、教育上の問題として捉えている。③不適応行動を好ましくない行動として、その適応行動を好ましい行動として捉えている。④行動特徴や障害特性の変化を見ながら教育を行っている。以上が考察された。

謝 辞

本研究に協力していただきました皆様に感謝致します。

引用文献

- 1) 文部科学省 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 2012
- 2) 淵上克義 学校が変わる心理学～学校改善のために～ ナカニシヤ出版 1995
- 3) 大山卓・唐津愛子 特別支援教育におけるコンサルテーションについての一考察～アスペルガー障害の子どもへの環境調整による不適応改善と描画の変化について～ 愛知教育大学教育実践総合センター紀要 11 319-325 2008
- 4) 松山郁夫 学童期の発達障害児の行動に対する見方 九州生活福祉支援研究会研究論文集 7(1) 18-24 2013
- 5) Wing, L. (1996) The Autistic Spectrum. Constable and Company Limited, London. 久保紘章・佐々木正美・清水康夫監訳 自閉症スペクトル 東京書籍 1998
- 6) 文部省 学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議 「学習障害児に対する指導について（報告）」 1999
- 7) 上野一彦 LD と ADHD 講談社 2003
- 8) 文部科学省 「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」 2002
- 9) 同上 4)